

令和元年度

第1回ふなばし市民大学校運営協議会

日 時：令和元年9月27日（金）

14時01分～15時41分

場 所：ふなばし市民大学校 第1教室

午後2時01分開会

○事務局（西本）

定刻を過ぎました。鳥海委員さんがまだお見えになっておりませんが、ご出席のご連絡はいただいているので始めたいと思います。

本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

今回、藤井委員が退任されまして、ふなばし市民大学校運営協議会委員に変更が生じております。運営協議会を開催する前に、新たな委員に、ふなばし市民大学校運営協議会委員の委嘱状の交付をさせていただきます。通常ならば学長である松戸市長から交付するところでございますが、学長及び副学長は公務がありますので、二野社会教育課長から委嘱状の交付をさせていただきます。

お名前をお呼びいたしますので、大変恐縮でございますが、自席でご起立くださいませ。

（二野社会教育課長より丸笠三千男委員へ委嘱状を交付）

○事務局（西本）

ありがとうございました。

続きまして、お手元の資料の確認をお願いいたします。まず、運営協議会の次第、ホチキスでとめていないものが3枚あるかと思えます。次第と裏面に席次表、それから、2枚目が名簿、その下には資料1から5まで資料ごとにホチキスどめをしておいてございますので、ご確認ください。不足等よろしいでしょうか。大丈夫でしょうか。

続きまして、報告事項がございます。本日、高齢者福祉課長の篠原委員と生涯スポーツ課長の竹中委員は、公用のため欠席する旨の連絡を受けております。なお、竹中委員は去る4月1日付の人事異動によりまして、生涯スポーツ課長に着任されまして、新委員として辞令の交付をあらかじめ済ませておりますことをあわせてご報告いたします。

それでは、ここからは、ふなばし市民大学校運営協議会要綱第6条第1項によりまして、高山会長に議事の進行をお願いしたいと思います。どうぞよろしくをお願いいたします。

○高山会長

それでは、ただいまより令和元年度第1回ふなばし市民大学校運営協議会を開催いたします。

本日、船橋市情報公開条例第26条の規定により、船橋市の設置する附属機関等の会議は原則公開とされていることから、傍聴人の受付をいたしましたところ、傍聴の申し出が

ありませんでしたので、ご報告します。

それでは、次第に従いまして順次進めさせていただきます。

私のほうから、改めまして皆さんこんにちは。本協議会、ことしの3月以来、6カ月ぶりになりますけれども、令和元年度になって初の協議会になります。この間、きょうは報告があると思いますけれども、議事（3）号、（4）号でいろんな協議が進んでおります。令和2年度の入学案内の募集は例年ですと12月から始まります。その前に入学案内等を確定しなければいけませんので、そう期間がありません。きょうの運営協議会で皆さんから忌憚のない意見を出していただいて、よりよい審議をしたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

それでは、これより議事に入ります。

初めに、議事第1号「副会長の選出」です。副会長であった藤井委員が退任され、現在副会長は空席になっております。ふなばし市民大学校運営協議会要綱第5条第2項に「会長及び副会長は委員の互選により選出する」となっております。私といたしましては、今までの慣例でいきいき同窓会に副会長をお願いしてきましたので、丸笠委員にお願いしたいと思いますが、皆様いかがでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○高山会長

ありがとうございます。では、副会長は丸笠委員にお願いしたいと思います。

どうぞこちらにお願いします。

（丸笠委員 副会長席に移動）

○高山会長

それでは、副会長になられました丸笠委員よりご挨拶をいただきたいと思います。

お願いします。

○丸笠副会長

皆さん、こんにちは。いきいき同窓会の会長代行をしております丸笠でございます。どうぞよろしく願いいたします。

藤井前会長には、皆さんに大変お世話になりましたが、どうしても健康上の理由で同窓会の会長並びに本委員を続けていくわけにはいかないというようなことで、やむなく8月10日付で退任、辞任することとなりました。かわって私が参りましたのですが、早速、きょう副会長にということで皆さんからご推薦をいただきました。にわか仕込みで、この

委員の仕事も全くの初めてで要領わからずというふうな状態でございますので、どうかご指導よろしくお願ひしたいと思ひます。

○高山会長

ありがとうございました。

次に、議事第2号「平成30年度修了生及び令和元年度入学生について（報告）」、事務局より説明をお願いします。

○事務局（西本）

では、説明申し上げます。着座にて失礼いたします。

資料1をごらんくださいませ。めくっていただきまして1ページ目です。「ふなばし市民大学校応募者・入学者・修了者 年度別比較表」をごらんください。4段ありますけれども、上から2段目が平成30年度、昨年度の状況になってございます。平成30年度の修了生は、まちづくり学部93名、いきいき学部374名、合計で467名でございました。入学者が499名おりましたので、修了率は93.59%となっております。

次に、2ページ目をめくっていただきまして、年度の表記がちょっと混在しておりますが、平成31年度のふなばし市民大学校の出願状況の一覧になってございます。最年長が88歳の方で健康学科2に、最年少がスポーツコミュニケーション学科で25歳の方がいらっしゃいました。

次に、駆け足ですが3ページ目をごらんくださいませ。今度は学科別の在籍者の一覧でございます。令和元年度の応募者総数は601名でございました。定員に対する倍率は1.09倍となっております。入学者ですけれども、まちづくり学部が105名、いきいき学部が374名、合計で479名となりました。しかしながら、この表は8月1日現在でございますが、残念ながら10名ほどの退学者がいらっしゃいます。理由としましては、仕事のご都合でありますとか、体調を崩されたですとか、そういったことと聞いております。

次に、4ページ目をごらんくださいませ。4ページ目、5ページ目、続いておりますけれども、入学者の詳細集計となっております。入学者479名の在住地区別、あとは郵便番号別ですとか、年齢別、地区ブロック別、男女別の集計になってございます。昨年度の議事録を拝見した際に、生徒さんがどの辺から来ているのですかというご質問がありましたので、こういった集計をつくってみました。東は多分面積が広いのしょうけれども、ブロック別で見ても大体皆さん均等に来られているのかなという気がしますけれども、ご参考になればと思つてつくってみました。

一番最後の6ページ目になります。こちらは、入学願書提出時に行いました応募の動機等のアンケートの集計結果でございます。市民大学校への応募の動機については、「自己啓発」が半数近くで一番多くなってございます。続いて、「仲間づくり」ですとか「地域活動に役立てる」というふうが続いております。問いの2番目、どこで市民大学を知ったかとの問いにつきましては、「広報ふなばしを読んで」が一番多く、パーセンテージは書いてありませんが約41%でございました。続いて、「市民大学校のパンフレットを見て」ですとか「知人の紹介」「入学案内を読んで」というふうが続いております。パンフレットはカラー印刷の二つ折りとなっております、市内各所に配架させていただいたほか、昨年度の学生に持ち帰っていただいて知り合いの方に配布していただくなど、ご協力をいただいたことがございます。

簡単ですが、以上で説明を終わります。

○高山会長

ありがとうございました。

ただいまの西本さんからのご説明に対して、何かご意見とかご質問がありましたら、お願いいたします。特段よろしいですか。

それでは、次に、議事第3号「カリキュラム検討委員会について」、事務局より説明をお願いいたします。

○事務局（田久保）

それでは、田久保のほうから説明をさせていただきます。

今回、本日を迎えるまでにカリキュラム検討委員会を3回開催しておりますが、本日が第1回目の運営協議会ということで、3回分をご説明させていただきます。詳細については割愛させていただく部分もございますが、資料を後ほどごらんいただければと思います。

それでは、まず資料2をお開きください。資料2の下に4ページという表記があるかと思いますが、こちらは第1回目の討議の議論のまとめと、それから、学部・学科の考え方の1案、2案、3案ということで、18ページまでございます。この案1から3というのは、我々事務局の中でいろんな協議のプロセスがございましたので、それを記載しております。これにつきまして詳細は割愛させていただきますが、大きな変更につきまして、これから説明をさせていただきます。

まず、資料2の4ページからです。こちらは、1回目の要旨をまとめたものになっておりますが、1回目の大きな議題は、「市民大学校の設置目的」と「基本方針について」と

いうところが大きい議題でございました。今まで薄々は書いてあったり、皆様のご記憶にある部分もあるのですが、明文化をしてきていませんでしたので、このカリキュラム検討委員会を開催するに当たり、大きな課題の一つになっておりました。それを1回目で明文化をしようということで議事になっております。

次のページ、5ページをお開きください。5ページの4「市民大の設置目的」ですけれども、「生涯にわたって学び続け、その成果を個人の生活や地域での活動等に生かすことができるようにするための学習環境を提供する」と。この2行が設置目的を明文化した内容になります。ただ、この2行だけでは伝えきれない部分もございますので、そこを5番目、「市民大の基本方針」ということで、設置目的だけでは理解しづらい部分を、学習環境を構成するものとして3つの場を挙げました。(1)番、(2)番、(3)番は、「学ぶ場」、「活かす場」、「つながる場」ということで、ご存じのように、一昨年つくりましたふなばし市民大学校のパンフレットと応募要項に書いてある項目がこの3つなのですが、それをもう少し具体的に書いてみようというところが、この基本方針の3つになります。

(1)番目、(2)番目はお読みいただければわかるかと思えます。この(1)と(2)の2つの場を設けながら、学びと活動をつなげる好循環にしていく、持続的な学びと活動をつなげる好循環を目指したいというのが、この(3)番になりまして、ここまで書いているのはあまり見受けられないのではないかとということで、カリキュラム検討委員会の委員長も、これが船橋の特色になるでしょうというご意見を頂戴しております。

この言葉をつくるに当たって、市民大学校が16年前に開校するときとは社会環境が大きく変わっておりますので、やはり10年前と違う社会環境を鑑みた上でこれをつくらなくてはならないという取り巻く環境等を6ページ以降に書いてございます。

6ページの7番「学部について」ですが、さまざまな環境の変化を押さえながら検討した結果、この学部については、いきいき学部とまちづくり学部という2学部制でこのまま継続してよいのではないかとということで、委員会の中でもご意見が出ました。社会教育は自己の自発的な学習という側面と学習の成果を地域に還元する側面と、それが一つの根拠となっていきいき学部とまちづくり学部をつくるというようなことで、委員会の中でこの設置目的、基本方針、学部の構成については、この考え方でいいのではないかとご意見を頂戴いたしました。

あとは、7ページの8「運営体制」ですが、これはまだまだこれから詰めていく必要もあるのですが、この後に申し上げますカリキュラムを選定するに当たり、やはり組織とし

てきちんとつくっていったほうがいいのではないかという私どもの案のような、こういうことも考えていますということを表にしたものが7ページの8番ということになります。

次に、8ページですが、8ページから18ページまで「案1」「案2」「案3」がそれぞれ資料としてとじ込んであります。このプロセスをいろいろとごらんいただきながら、最終的には「案3」でカリキュラムの詳細を2回目には詰めることになりましたので、皆様、16ページの「案3」のほうをごらんいただきたいと思います。

16ページの「案3」ですが、まず、これから学部・学科の詳細を詰めていくに当たって、大きく変わった内容がございます。これは1番の対象年齢になります。ここで現状と変更後が書いてございますが、お気づきのように、いきいき学部が現状では60歳以上ということでしたが、変更後は18歳以上、これが非常に大きな変更点になっております。

ここは社会教育のご専門の委員がいらっしゃいますので、いろいろなお話を聞く中で、社会人の学習欲求が高いのが30代、50代、それから65歳前後と、3つの山があると委員のほうからおっしゃられました。そういうデータもあるということでした。そうすると、現在のいきいき学部は60歳以降の山しかクリアをしておりません。そこは創設のプロセスと大きなかわりがありますので、ご存じのように市民大学校は老人大学を含め4課の事業を統合しております、その中で最も学生数が多く歴史がある老人大学が移行時に、人数の割合も非常に大きく、そのまま現在に至っておりますので、市民の皆様の中にも「市民大学」イコール「シニアの学ぶ場」というイメージも固定されているところも否めない部分もございます。本来、義務教育以降が生涯学習になるので、市民の皆様全員にご利用いただけるようにしていくのが市民の学びの場ということで、今回18歳以上ということで、いきいき学部も門戸を開くということで、今回の大きな改変の一つとなっております。

ただ、18歳の方が来るとはなかなか考えづらいので、実際は入りたくても入れない50代の方ですとか、40代の方ですとか、そういう方にご利用いただいて、生き生きとした学生生活を送っていただけるといいのかなと考えております。

それでは、次のページ、17ページをごらんください。

まず、まちづくり学部の学科の構成として、第2回のカリキュラム検討委員会の中で、この3案がいいでしょうということで委員の中からお話が出ました。それで、まちづくり学科の改変といたしましては、ボランティア入門学科と生涯学習サポート学科を統合する

という案が出ました。その経緯は、昨年までのカリキュラムを1年間を委員の先生に見ていただくと、同様の内容が重複している部分が多いということも一つの要因となって、全てボランティアを育成するのですが、スポーツコミュニケーションとマイスターは分野が特定されますのでちょっと特殊なのですが、ボランティア入門コースと生涯学習サポート学科というのは統合して、下にイメージ図が書いてございますが、前半部分はどの学科もボランティアの育成なので、共通学科を受講した上で、半年以降、ボランティアのコースと生涯学習のコースに分かれていったらどうかというのが、この2回目のカリキュラム検討委員会に出された案でした。この後、引き続き検討しますということで、2回目を終了しております。

続いて、18ページです。18ページはいきいき学部の変更事項となっております。

大きな変更点は3点ございまして、まず、現在の一般教養の名称を変更しますが、この段階ではまだ具合的な名称は出ておりませんでした。ただ、内容につきましては、現在の内容が体系立った内容にはなっていなかったもので、今後の人生100年を心豊かに過ごせるきっかけづくりになるような体系の柱をつくりましょうという課題をいただいて、この後のカリキュラムの詳細に作成をするという流れになりました。

それから、2番目の変更点は、健康学科と陶芸学科の統合でございます。特に、ここ2年間、健康学科の応募者数が非常に減少しておりまして、原因はほかの学科もそうですが、まだお勤めしていらっしゃる方がとても多くて、退学の理由も、お勤めですとか体調ですとかご家族があるのですが、お仕事の調整がつかずやめますという方もいらっしゃいますので、10年前に比べると相当お仕事をなさっている人が増えているんだなど、これは肌感覚ですが感じます。

また、本市では健康長寿日本一を目指して地域で非常に細やかに健康活動をしております。わざわざ遠い市民大まで来なくても地域で活動ができる環境も整ったということも、ひょっとしたら一つの要因になっているのではないかというご意見もあります。

また、平均年齢が70歳を超えている中で、この健康学科は校舎以外に夏見の運動公園ですとか習志野のほうのパークゴルフなど、本校だけで活動せずに高齢者の方々にあちこち出かけていただくことがあって、それも多少負担になっているのかなと要因として事務局の中では考えている部分もございました。内容もニュースポーツの体験が多かったというところで、今申し上げましたような要因を考えました。

でも、これから人生100年健康長寿を求められますので、皆さんに健康な生活を送っ

ていただく学科としてはやめられませんので、そこを心身ともに健康な生活が送れるような学科をつくれぬものかということで、「こころとからだの健康学科」ということを考えて、マインド部分と身体の両方から、そこは非常につながっている部分でもございますので、ただ身体を動かすだけではなくてマインド面も、それから、創作活動をして右脳も左脳も両方使えるようなそういうカリキュラムを検討していきましょうということで、その中に陶芸も含まれておりますので、健康学科と陶芸学科を統合したような内容の学科にしたというところがいきいき学部の中では大きな学科の変更になります。

次に、3点目ですが、この表の中では一番下、ライフデザイン学科でございます。こちら人生100年健康長寿と言われるようになり、これから人生100年時代になってきて、今までは60歳で定年退職した人が今65歳定年と言われるようになりました。今後、この先70歳まで、これも国のほうから70まで働ける環境をとということで新聞の記事にも出ておりますけれども、そういう年代が増えていくと、やはりこの先お金もある程度大事な要素になってきますので、金銭的に自立ができるような内容を。それから、お金だけではなく、やはりいきいきが元気な健康長寿につながりますので、地域のボランティア活動も必要ですけれども、それプラス、お金もある程度つくって社会ともつながるような、そういうものがニーズにこれから出てくるだろうということで、先んじてこちらのほうでライフデザイン学科という学科を新規にご提案を申し上げます。このライフデザイン学科も含め、この3点がいきいき学部の大きな変更事項となりました。

次に、資料3「第3回のカリキュラム検討委員会資料」ということで、これがつい先日、今月の9月17日に行われた会議の結果でございます。

まず、資料3の3ページをお開きください。この表は、まちづくり学部といきいき学部を一覧表にまとめたものでございます。こちらかいつまんで説明していきませんが、全学科の内容も含めてざっくりご説明させていただきます。

まず、3ページですが、まちづくり学部の目的は、コミュニティを支えて地域の課題解決に主体的に参画できる人材をつくりましょうということで、まちづくり学部の学科を構成いたしました。

それから、この中で、左側が現在の学科、右側の「学科名（新）」と書いてあるのが今後新しく学科名にしようという案ですが、ここの順番がいつもスポーツコミュニケーション学科から創設の順番で書いてあったのですが、まちづくりボランティア養成学科が一番上になりました。これは非常に事務的な解釈になってくるのですが、まちづくり学部4学科

は全てボランティアを養成する学科ですから、ボランティアの学科を筆頭科にしていきたいというところで、これを一番頭に持ってまいりました。あとは創設順にしております。

一つずつ上からざっと説明させていただきます。こちらの、旧ボランティア入門学科は、市民大学校開校までは自治振興課がボランティア大学という名称で所管をしておりました。当時のボランティア大学は、期間は5月から2月と私どもと同じなのですが、回数が月に1～2回で年間14回程度の講習だったようです。ですから、内容も初歩的なものということで、市民大学校に移行する際も、授業回数は増えましたが、内容は入門という名称があらわしているように初歩的な内容を踏襲したと考えられます。

ただ、現在開校して16年間経過をし、その中でとても大きな変革があったのは、本市に市民協働課が創設されて、ボランティア活動をしていらっしゃる方たちの活動の場であったり、いろいろな事業が行われるようになったというところが、開校当時と16年たった今と大きな違いでございます。ボランティアセンターでも短期間のボランティア入門の講習会を実施しているということもございますので、今回教育内容を検討するに当たり、開校16年目で今までの学習とその成果が非常に大きく出ておまして、本日も松本委員いらっしゃいますが、ボランティアサロンのようにとても活発に活動していらっしゃる方が出てきたというのは、今までの成果だというふうに踏まえ、さらに今後はステップアップを目指した学科にしていく必要があるのかなと考えて、今後、カリキュラムの詳細を考えるに当たり、知識と技能とボランティアとしての姿勢というか、そういう3本柱でもう少し詰めて考えていこうということになりました。

それでは、一つ一つの学科をそれぞれ見ていったほうがお話が早いと思いますので、4ページをごらんください。

今申し上げましたボランティア養成学科の内容になりますが、ここで今までと違った点が、幅広い活動を皆様に知っていただくのに何を基準に皆さんにお話ししたほうがいいのか考えた中で、市民大学で皆様に学んでいただくということで市の基本計画が基本になるかというところで、分野別計画から各分野の行政の現状を学び、それを課題に落とし込んでいく作業ができるような授業をしたらどうかというところで、一つ考えております。

また、学生さんが関心のある団体への実習期間を長期にして、単なるお手伝いや見学ではなく、各団体の一員としての経験を積んで、その結果を持ち寄って学生さんたちの視点で自分たちができることは何だろうということを考えて、それを修了後も活動につなげていけると、私たちの学科で学んだ効果が出ていくのではないかというふうにつくったのが

こちらの4ページの案でございます。

次に、5ページのスポーツコミュニケーション学科ですが、こちらは今年度リニューアルをいたしましたので、カリキュラム内容は大きく変わってございません。スポーツ健康都市宣言を立ち上げている船橋市の柱となっておりますので、引き続き、スポーツを通じた市民活動のお手伝いをする人材育成をやっていくというところで、スポーツコミュニケーション学科は継承してまいります。

次の6ページでございます。こちらは生涯学習コーディネーター養成学科です。今の私の説明を聞いて、先ほどの2回目の資料とちょっと違うとお気づきになったかもしれませんが、2回目ではボランティアと生涯学習サポート学科を統合するという案が出ていたのですが、実は我々も2回目の検討委員会の後、引き続き協議をしていく中で、生涯学習の筆頭課で生涯学習を担う人材をつくっていくのは我々社会教育課の大きな命題ということで、ここはやはり引き続き生涯学習のボランティア育成をします。ただし、ボランティアというよりも、もう少し一歩上を目指したコーディネーターと、もともとの名前が生涯学習コーディネーター養成だったので、原点に戻ったような形になっておりますが、そこに書かれているものを目指そうということで、最終的には現状の4つの学科に戻っております。

「学びの仕掛け人」という表現がふさわしいかどうかわかりませんが、ただ公民館の事業をお手伝いする人だけではなく、学びの仕掛け人で、何か課題があったらその課題を地域の人たちと解決するような、人と人だったり、人と組織だったり、そういうものをつなげるハブのような人材をつくっていききたいと、これが生涯学習の担当課としてやるべきことなのかなというふうに考えました。ただ、それは、人材をつくるだけではできない話で、今後、仕組みづくりが重要になってきますので、修了した学生さんが地域でどういうふうに活動できるか、活動しやすい場をどうすればいいか、そこは本課のほうでも連携をして検討していく必要があると考えておりますので、まだまだ課題はあると私たちも考えております。

次に、まちづくり学科の最後ですが、ふなばしマイスター学科になります。こちらは資料の7ページをお開きください。

こちらのマイスター学科ですが、生涯学習基本構想（一番星プラン）という私たちの根幹となる基本計画があるのですが、その中に、「まちづくりの参加意識の根幹となる」「自らの地域に関心や愛着を持つことが大事」ということが書かれておまして、まさしくそ

れを実現して現状でいろいろなところで活動してくださっているOBがいらっしゃいますが、そういう使命を担っているのがふなばしマイスター学科でございますので、まずは船橋を知り、持っている資源や魅力を再発見して、発信できる人材を育成する必要があるだろうということで、引き続きやってまいります。授業の組み立ては、校舎で授業と並行して各自で学んだ研究テーマについては、マイスターと言えるように引き続き精進して研究をしていただき、それをもって市民対象の講座の講師ですとか、船橋の歴史遺産、伝統芸能の継承の一助につながる活動ということを目標にやっというこにしております。

また、次年度は、公益財団法人図書館振興財団主催の「図書館を使った調べる学習コンクール」というものに出展を念頭に、図書館ともコラボしながら授業を進めていきたいと考えております。

以上がまちづくり学部のざっとした説明でございます。

次に、いきいき学部ですが、まず8ページの、現在、一般教養学科と言っている学科を、この段階でこころと学びの教養学科という名前にしようということで案が出ましたので、ひとまず新しい名前のこころと学びの教養学科でご説明させていただきます。

人生100年を心豊かに生きる自己実現のパワーを身につけてもらえる内容にしたいと考えておまして、これにつきましては今まで特にカリキュラムの柱がなかったので、今回は現状の健康長寿のために必要だと言われているような6本の柱を立てまして、その柱に沿ってカリキュラムの詳細を今落とし込んでいます。ただ、これはまだまだこれから変わる可能性がございますので、本日のところは、この名称ですとか、目的ですとか、それから、分類がどういう分類なのかというところをごらんになっていただきたいと思っております。

次に、9ページでございます。先ほど少し申し上げましたが、こちらがこころとからだの健康学科、これも実はこの後、引き続き検討中でおまして、内容の詳細につきましてはまだ決まり切っておりません。ただ、こちらも柱としてはこころの部分とからだの部分の大きな分類の中に、こころの分類の中にはこころの部分と創作活動ということで、体だけではなくて手先や脳を動かす、そういう内容を含みました。

それから、からだの健康につきましては、引き続き今の健康学科の踏襲をしている部分もありますが、これももう少し音楽の部分を入れたほうがいいのではないかと。船橋はやはり音楽が非常に盛んですので、せっかく小中が頑張っているのだから、もうちょっと大

人の人も音楽に親しみましようということで、音楽を入れたほうがいいのではないかと話が出ておりますので、引き続きこの詳細については現在も検討しているところでございます。

次に、10ページのパソコン学科ですが、実はこれも紆余曲折で、2回目の案をごらんいただくといろいろ変わっているのですが、現状は今のままで、本当の初心者の要望がまだあるのであれば、その人たちを見捨てるわけにはいかないだろうということで、パソコン初心者の人をもう少しフォローしていきましょうということに現状はなっております。これがパソコン学科の現状でございます。

それから、最後の11ページになりますが、ライフデザイン学科と申しまして、先ほどの人生100年の今後の60代、70代、私も既に60歳を過ぎておりますので現状の60代なのですが、今の60代ではなく、これからカリキュラムをそうそう大きく何回も何回も変わらないので、もう少し先も見越してつくっていかなくてはいけないということで、これからのライフデザインを自分でデザインできるような学科をつくっていきましょうということで、このカリキュラムを組んでおります。

こちら、仕事をやめたこれからはありますし、今からどう変わるか、人生100年に向けてどうしようというデザインを組むには、まずは自分の中で内発的な動機を整理する必要があるだろうということで、まずはマインド面をこのカリキュラムの中では大きく扱っております。ただ、こちらについても、実際にこれからまた新しい仕事をつくったり、起業する可能性がある方については、起業そのものをもう少し実学の部分も含んだほうがいいのではないかと意見も出ております。これも講師のほうと調整をしておりますので、ここもまだまだ変わっていく内容になっております。

長い説明になりましたが、1回目から3回目の説明は以上でございます。

○高山会長

ありがとうございました。

7月24日の第2回、つい先週の火曜日の9月17日の第3回、それと1回目の資料も含めて、田久保さんからわかりやすい説明をいただきましたけれども、皆さんのほうから質問とかご意見がありましたら、お願いいたします。

三橋委員、お願いします。

○三橋委員

中身としてすばらしいご提案だなというのが感想です。非常にポイントを得ているのと、

ビジョンとミッションがきちんと整理されていて、大変よくつくられています。大変だったろうなというのが第一の感想です。

そういう意味では、ある時代の変化をつかんでいくという課題をきちんとクリアしていくのかなと思っています。もともとボランティア学科ができたときは、須藤さんが社会教育課長だったときに、須藤さんと社会教育課のスタッフの方と何回も協議して作り上げたときのことをついつい思い出しますが、そのときの福祉中心のボランティアから、そうでないものをどうやって組み込んでいくとか、実際にやっている人たちをどう結びつけるかというようなことが課題だったのかなと、もう一回改めて思っています。

今、私なんかはいろんなボランティア団体やNPOとかかかわっていますけれども、この15年ですごく変わったことは、ボランティアが昔は専業主婦が中心だったんです。そこがすごく大きく変わって、男性の方が増えてきているというところがあるのと、もう一つは、皆さん専業主婦ではなくて、必ずお仕事をしながら、ほかのことをしながらボランティアをやっている方の人数が、ここ5年から10年で圧倒的に増えているんです。

それぞれのボランティア団体、NPO法人もそうですが、どうやってボランティアを確保するかというのがすごく大きな課題で、私自身もかかわっているいのちの電話なんか、電話の相談を受けていくに当たって1年半の研修をして、認定されて相談員のボランティアになるのですが、その人数がなかなか伸びないと、もう一つは皆さんがいろいろなことをやりながらボランティアをされているので、会の運営を全部ボランティアでやるのが非常に難しい時代になってきている。そうしたときに、どういう人材をボランティアとして送り出していくのかということに対しては、まだまだ模索をしなければいけない時代なのだろうなという気はしますけれども、そういう意味では非常にいいなと思っています。

市民大になったときに、まちづくり学部だけは18歳以上にしましたね。いきいき学部のほうは60歳でした。実際にボランティアやスポーツコミュニケーションもそうですけれども、僕の記憶では、ボランティアもこの16年の中で、たしか20代の人何人か参加をしてきているケースがあったと記憶していますので、いろんな年齢層のところに可能性を広げるというのはすばらしいなと思います。ほかの市町村ではまだまだ60歳以上という規定が多いですね。僕も講師をしていましたけれども、県の生涯大なんかもそうです。僕はほかのところでも、船橋は進んでいますよ、成人の市民みんなに門戸が開かれていますよというお話をさせていただいて、もう一回思い返しています。

そういう意味では、今回の取り組みの中身は非常にいいのかなというふうに感想として

は持ちました。

○高山会長

ありがとうございました。

花村委員、お願いします。

○花村委員

随分新しく変わったということで大変だったろうなと思います。生涯学習のところなんかは、以前は何が変わったのだろうと思っていたのが新しくなったので、それなりに期待できるのではないかと思います。

この中できょう全く新しく出てきたものとしてライフデザインというのがありますよね。これは今までなかったのでもっと興味を持って見ているのですが、やはり新しい時代で長期間健康に生きていくためには、あるいは現実的な生活を営むには、それなりの裏づけ、物理的な裏づけとか、そういったものも考えておられるのではないかと思います。市民大学という性格からして、ボランティアだとか市民活動だとか、そういったものとの関連から捉えると、ビジネスとして捉えることの視点が、いわゆる一般企業が企業としてやるというよりも、社会的な事業としてもものを見て行って、そういうものを育て、それを自分たちの物理的な裏づけにもつなげていくというような視点。

今まではコミュニティビジネスだとか市民事業だとか、そういったものが既にあって、特にNPOの場合は昔みたいなボランティア活動ではだめで、事業的な要素を強めなければいけないと思っています。一方では、企業も社会貢献的なものを非常に意識するようになってきて、社会事業としての企業のあり方というのが問われていますね。

ですから、そういう観点から見ると、この中にはもっと社会的事業としての見方を強める必要があるのではないかと感じました。その辺がここからは伝わってこないような気がするんですね。一部NPO起業だとかそういうものがありますけれども、非常に隅っこにいて、もっと柱として、今までの一般企業とは違う面をもっと全面的に出していくということをやられるといいのではないかと思います。

○事務局（田久保）

市民大学としてどういうライフデザイン学科にするかというところを、もう少し明確に出したほうが良いというコメントですか。

○三橋委員

関連してですが、多分おっしゃりたいのは、もうちょっとソーシャルビジネスとしての

もの、今、NPOだとか企業も社会貢献性の高い分野のものをしているんです。これはもともとインドで銀行を女性が始めたのがきっかけになりましたけれども、そのソーシャルビジネスは株式会社であって、ボランティアは単に非営利だとは言えなくなっている部分が実はいっぱいあるんですね。そうすると、その部分を強調してソーシャルビジネスとか社会貢献性の高い事業をどうつくっていくのかということを経験された方がいいのではないか、というのが花村先生のご意見だと思います。

○事務局（田久保）

ありがとうございます。

○三橋委員

よろしいですか。ちょっとそう感じたので言ったのですが。

○花村委員

表現がうまくいかなかったですね。

○高山会長

今の件に関して言いますと、例えば市民の方は1万5,000円ないし2万円を払うので、もうちょっと専門的な知識とか実学的なことを勉強したいという希望があると思いますので、これからまた中身は詰めていくのでしょうけれども、その辺もお願いしたいと思います。

松本委員、どうぞ。

○松本委員

第2回のカリキュラム検討委員会と第3回のカリキュラム検討委員会を傍聴させていただきました。

第2回を聞いたときに、我々の団体には、ボランティア活性化勉強会というのがあります。そこでそのテーマを取り上げて議論したのですが、意見書というのを提出させていただきました。そこで我々が言いたかったのは、ボランティア学科というのをもうちょっとよく知っていただけないかなという思いがありました。それから、もう一つは、先ほど田久保さんからも話がありましたように、平均的に定年が65歳で定着してきて、入ってくると高齢で入ってくる形、特に昼間の授業に出てこられる人ということで年齢的にも高くなってきて、なおかつ、どちらかというと仕事をいっぱいやってきたなという感じの人たちがいて、どこの団体も会長とか役員とか会計というのはなかなかやりたがらなくなっている。その人たちが悪いわけではなくて、そういう時代の背景があって、そういう人

たちをどのようにして世話人になってもらったり役員になっていただいて、活性化していったらいいのかなというのが我々のテーマでもあったのですが、実は他市の市民大学を見ても、やっぱり地域で頑張してほしいとか課題解決をしてほしいと書いてある市民大学ほど人が集まらなく、悩んでいます。

そういう意味でいくと、まず1つとしては、私もまちづくりボランティア養成学科というのに近いので、第3回の感想として、以前に行政パートナー養成講座というのを outs させていただきました。これは、もう10年以上前に outs させていただいたのですが、そのときと内容的には同じです。地域づくりの担い手になるということを前提に考えている行政パートナーの養成講座、そういうものをつくって、ここと同じように担い手を養成するという目線での講座をお願いしようと思っていました。

11年間、ボランティア入門講座の卒業生を受け入れてきました。11年間受け入れているとやっぱりどんどん時代が変わってきていて、そういう中で、どちらかというこうしてほしいみたいな目線でのボランティア要求をするというのは、本当にこれで人が集まるのかなというのが非常に心配です。前回のスポーツコミュニケーションのように、広報が徹底してコマーシャルを打っていただくとか、偶然にもオリンピックと重なっているという条件が整えば、ある程度の人数は集まるとは思います。それから、初物が大好きですから、初物で飛びつく方もいらっしゃると思うのです。先ほど田久保さんが言っていましたけれども、一度決めたらそう簡単にはいじりたくないというお話もあって、だとすると、我々の現実目線で行くと、これで募集をかけた場合、非常に厳しいのではないかと。

もしこれだとすると、我々が10年前に社会教育課に行政パートナー養成講座を持っていったときに、まず中央公民館でもどこでもいいから、とりあえず小規模でそれを立ち上げてみたらいかがですかとアドバイスを受けました。それと同じように、このテーマに関しても、私だけが考えているのかもしれないですが、現実には多分あまり集まってこなくなる。そういう中で試しにそういうことをやるという期間があってもいいのではないかと。まちづくりボランティア養成講座の良い悪いは、僕はいいと思っています。私自身、10年前に同じ思いで答申しました。

あと、特にまちづくりというと今までは、女性に嫌われていました。女性が半分以上いる世界ですから、本当は女性の方にもっと気楽に参加していただきたいという思いが強くて、ボランティア入門学科にしたのも、ハードルを低くして女性が入りやすくするというのも一つのねらいでした。そういう意味で、今回のまちづくりボランティア養成講座とい

うと、最初は間違えて飛びつくかもしれないですが、どれくらいの女性が飛びついてくれるのかなと。本来は半々ぐらいが理想ですねというところが、女性に対してどうなのかなと心配です。

先ほども話がありましたけれども、ボランティアというと特に福祉系は我々のグループ団体でも8割が女性です。ボランティア入門学科を卒業した人たちは本当に生き生きとして活動しています。そういう意味では、女性に対する目線というのもここに取り入れた形で、学科名、設置目的、修了後の活動というところも、もう少しやさしいまちづくりという目線に落としてもいいのではないかと。とはいえ、花村さんではないですが、商売にまですしょうという高い思いをお持ちの方もいらっしゃると思うので、そういう意味でいったら、まちづくりボランティア養成学科とは別に、ボランティア入門学科というのは残していただけないかというのがカリキュラム検討委員会を傍聴したときの感想です。

何で残してほしいかという、本当に私自身の話なのですが、市民大学のボランティア入門学科に入って、新しい友達、同じ志の友達がいっぱいできて、いろんなボランティアを知ることができて、その中でボランティア活動をしていくというのは、自分のセカンドライフがとても豊かになりました。実を言うと、同じ思いの人たちがボランティアサロンふなばしの会員の中にいっぱいいます。じゃあ、どこかの公民館で講座をやったらというのとの違いは、やっぱりここで1年間同じ飯を食うというところが非常に大きいと思います。実際に障がいのある方のお話、社会活動などの意見なども聞きながらいくということで、1年目で修了するときにはあまり決まっていなくても、2年目になるとほとんどの人が何らかのボランティア活動をはじめています。

リーダーになるかならないかというのは、最初は100人出ると30人しかリーダーとか世話人にならないのですが、2年たち3年たつと、40人、50人と増えてくるんです。要するに自分に合った活動だと役員も引き受けるようになります。リーダーにもなっていきます。最初からリーダー養成だなんて言わなくても、リーダーというのは少しずつ育っていくもので、そういう意味からいっても、この入門学科という現状の内容のものは、ぜひ残していただけないかなというのが私の思いです。

それから、今回勉強になったのは、午前と午後で午前のほうが応募が多い。だから、午前でも時間があいていたら、午前のほうにでも残していただけたらなと思います。

それから、生涯学習サポート学科も全く同じで、私もボランティア学科の後、平成21年にこの学科を修了していますけれども、当時のコー連協に提案した内容と全く同じで

す。本来のコーディネーターをやるべきだと思う。市民をもっと巻き込むべきだと思う。公民館は使われるのではなくて使うものなんだという形の提案をしたこともあります。

しかし、これを前面に出してしまうと応募者が減ると思います。昔は生涯学習コーディネーター学科だったじゃないですか。名前を変えたのは人が集まらないから名前を変えた経過があります。昔の議事録を見ていただければわかります。だから、そういう怖さをこれも持っています。

それから、私自身は生涯学習サポート学科に関しても、今、修了生は、企画運営を含めて公民館のお手伝いをしていますけど、みんな生き生きとしてやっています。だったら生涯学習のサポートでも良いのではないかと。生き生きとしてやっているのを、何でここで道をふさいでしまうんだというのが私としては少し気になっているところです。だから、逆説的に言えば、この学科も2つの道があったっていいのではないかという気がしています。

あと、質問としては、この後どうされるのですか。極端なことを言うと、きょうお話を聞かせていただいて、初めての方もたくさんいらっしゃると思うのですが、私どももその受け皿団体の一つですけれども、持ち帰って議論させていただいて、それで何か提案するという場なのか、それとも、スケジュールがこうなっているので、きょう採決をとって次のステップに行くのかというのは、どういうイメージなのでしょう。

○高山会長

まず、前段の要望とかご意見に関して、二野課長、何かご意見ありましたら。

○社会教育課長

まず、ライフデザインの説明のところがあると思うのですが、そもそも市民大学のあり方というのが全くビジョンが示されていなかったところで、実はそのところに関しては社会教育課でかなりの形で私も頭を使わせていただきました。やはり社会教育というのは、一番最初は自己学習というのが根本にあるわけです。その中から時代が変わってきて、学ぶことによってつながって社会貢献という、国の答申とかを見ても、今はどちらかというと社会貢献のほうがかかなり比重が大きくなっています。

でも、そこはどうなのかなということで、教育基本法から基本のところを読んでいきますと、まず自己学習と社会への貢献、この2つのベクトルがあると思うのです。その中で市は何をすべきかということを経験していろいろ読んでいくと、やはり学習環境の場の提供、だから勉強する場所と社会貢献につながるような学習、その環境を提供するというのが市民

大学校ではないかなということ、2学部制はやっぱり間違っていなかったんだなと思いました。

その中で、社会の時代が変わる中で、今一番インパクトが大きいのは、人生100年をどう生きるか。もっと言えば、多分皆さん、ライフデザインという50代、60代になってから次があるから、ぱっと見るとお金のところだと思うのですが、終身雇用制のほうも大分崩壊してきて、若い人も自分の選択がどんどん変わってくるような時代になると思うので、そういう意味で、こちら18歳以上という形にして、ライフデザインというのを持ったというのが一つの花村さんの（ご質問に対するものです。）だからソーシャル的な社会貢献事業というのは、確かにそれも必要だと思うのですが、ちょっとその念頭は今回のライフデザインのところではないというのを、まず1つお話ししておきたいと思っています。

それから、これだと人が集まらないのではないかみたいなご意見については、確かにその懸念はございます。私たちのほうも過去の経緯などを見て、また資料1のほうを見ていただくと、これが如実にあらわれています。資料1の1ページ目の合計のところだけ見ていただくと、28、29、30、31の合計の倍率が、28年度が1.71倍、29年度が1.35倍、30年度が1.15倍、31年度が1.09倍と、こういう数字の中で何ができるかということで考えさせていただきました。

実際にやるとして、例えば2年制にしてドラスティックに変えとか、いろいろ考えたところ。一部重複するかもしれないのですが、いろいろな意見の中で資料3を見ていただくとわかるのですが、例えば生涯学習サポート学科とボランティア入門を一つにしてやったほうがいいのかとか、いろいろご意見をいただきました。やはりいろいろ見てみると、今までの学科のあり方というのは間違いではなかった。やり方も間違いではなかった。

ボランティア入門もネーミングがどうだという話もあるのですが、今回もボランティア入門に関しては、いろいろなボランティアを体験してもらおうというのが第一にあります。そして、今何が一番大変かという、各ボランティア団体が少なくなっているというのが一番の問題です。そうすると、今まではこういうのがありますよと見せて、そこまでのところで終わってしまっている人がかなりいるのではないかとことがあるので、私たちが考えたのは、授業数は今までのそれでいいのですが、もうちょっと授業以外のところで、言い方が正しいかわかりませんが、手を引っ張ってボランティア団体の中まで入れて上げ

て、少しずつ手を離して行って、そこで定着していただければいいし、そうでなければ、ほかの団体のほうに行っていただくという形で、ボランティアを増やしていきたいというのが、まずボランティア入門の考え方。

生涯学習サポートに関しては、前回のカリキュラム検討委員会でもかなり言われたのですが、ボランティアをやる人ではなくて、地域の生涯学習のコーディネートをできるような人材をつかってほしいと言われました。そうすると、5～6年は活動しないとそういう人は生み出せない。座長である中教審の委員である明石教授も、それが大事なんだと。ただ、やり方は国としてもわからないよというようなことを言われましたので、まずこの生涯学習サポートもネーミングのよし悪しはあるのですが、やはりコーディネーター連絡協議会、これというのは今お話ししたようにいろいろな立場の人がいて、公民館のお手伝いをして机とか椅子を出すのも楽しいなということでやっている人たちがいて、やはり公民館という場があるので公民館で活躍できる人、これはもう社会教育課の今後の取り組みになるのですが、ここで講座を終わった後に公民館なり生涯学習施設のほうに行って、そこで一緒にやってもらうことによってスキルを高めて行って、そこでコーディネーターとなっていくようなことを構想しているような形です。ですから、このカリキュラムだけだとそこまで見えないと思うのですが、市としてはそのあたりを考えています。

これは前回にも言われたのですが、こちらのまちづくり学部については、そういう志の高いところにつなげていきたいというところはあるので、もうちょっと人を増やしたいというのも確かに原点にあるのですが、やはりそういう人材をつかっていきたいということで、今回そういうカリキュラムにさせていただきました。ですから、まちづくり学部のボランティア入門については、実際にボランティアができるような方でやって、生涯学習サポートというのは、1年では難しいかもしれないですが、ここを出た後に例えば公民館とか図書館とかでボランティア活動をして、施設のほうと社会教育課がタイアップして、そこでコーディネートできるような人材を育てるような、出た後のところまで今回は踏み込んでみようかなと考えています。

ちょっと答えになっているかどうか、わからないですけど。

○高山会長

サポート学科でいうと、今までやっている養成講座的なサポート学科ではなくて、地域のコーディネーターを育てる。ですから、今やっているコーディネーターの上級編をつくるというイメージでしょうか。

○社会教育課長

そうですね。ただ、そこはとってもハードルが高いので、コーディネーター連絡協議会の中に入っていて公民館で活動していく中で、いろいろな地域の人たちが知り合わないとコーディネートできないですから、いろいろな団体とかを知ってもらって、そこでつなげるような人が、全員が全員というのは難しいとは思いますが、そういう人たちをつくっていききたい。多分、生涯学習コーディネーターの最初の考え方はそうだったと思うのですが、社教のサポートが悪いのと公民館とかにお願いしてこなかったところがあるので、なかなかそこまでできていない。ちょっと原点に戻って、そこをやってみたいというところがあります。

○高山会長

例えば資料の3ページを見ますと、学科名は変わるにしても、次の募集のときにこれを見て、私はまちづくり学部のどこに行ってみようかという、ちょっと市民は混乱するのではないか。例えば、まちづくり学部というのはまちづくりの地域活動のボランティアを養成するんですよと言われたときに、じゃあ、まちづくりボランティア養成講座もあります、生涯学習コーディネーター養成講座もあります、マイスターもなったとき、説明されてもよくわからなくなってしまうので、ちょっと混乱するなという感じはします。その辺はこれからまた詰めていくのでしょうけれども。

○社会教育課長

その辺に関しては、募集要項のほうにも、今の募集要項はどちらかというとぼわっとした形で、こんなことをやりますですが、もうちょっと明確に、あまり楽しくないとだめですが、こういう人を目指しますみたいなものは明確に書いていきたいと思います。できれば講座のところメインとなるおもしろそうなところを、こういうのをやりますで、それによってこういう人をつくります、みたいなところをわかりやすいように書いていきたいと思っております。

○高山会長

川田委員、予定の時間もあるでしょうから、どうぞ。

○川田委員

すみません、きょうは退席をさせていただくのですが、まず最初に入学願書のアンケートを拝見させていただいて、やっぱり自己啓発をしたいというのが一番だった。これがもとになっているのではないかと思います。そして、今回は広報ふなばしがすごく大きな影

響を与えたこと、市民大学校のパンフレットを読んで説明会に来ていただき入門していただいたという経緯があったと思います。先ほど女性の目線という話があったのですが、女性は難しいことを書いてあるのを見たら、その場で説明会も来ないと思いますし、何か理解ができないような難しいことをたくさん書いてあるパンフレットだったら、説明会はおろか、私にはついていけないと、後退すると思います。

ですから、まず第一歩は、せっかくつくった市民大学校のパンフレットがすごく良い効果が出たので、その中でやりたいものを見つけていただくコーディネートを私たちがしていく。前に言ったと思うのですが、公民館別にどの地域から来たのか質問をしたことに対して、きちんと回答を出していただいております。東部地区がすごく固まっているんだなというのも見せていただきました。集まる場所というのはやっぱり街中の方たちなんだなというのわかりました。そうすると、いろんな議論よりも、まずやりたいことを見つけていただく広報の仕方が一番問題なのではないかなと。1年間スポーツ健康学科でも何でも入ったら、次もほかに行けるじゃないですか。その中で理解をしていくためのサポートをその学科でしていただけたら、女性の目線とか何とかということよりも、より多くの市民が市民大学校ってすごくいいことをやっているんだというのがわかっていただけるのではないかと思います。やっぱり一番は、全学科18歳からになったということで、ものすごく窓口が広がって、60歳から18歳って、ものすごい年齢の差ですね。18歳からみんな入れるんだというのを一番に、たくさんいろんな資料を見ていただけるような場をつくっていただけたらいいなと思いました。すごくすばらしくて、私も今回初めてよくわかりました。ありがとうございます。

○丸笠副会長

いきいき学部のほうでちょっと質問ですが、健康学科と陶芸学科で今までは160名の定員でやってきた。それをこの次からは合併して50人に減らすと。ざっくり見まして、こんな3分の1以下に減らさなくてもいいのではないかという感じはするのですが、年齢も18歳に引き下げまして、その辺のねらいというか考え方というか、どういうふうなことからきたのかなと。

○事務局（田久保）

実は、これは3回目までの結果でお出ししているのですが、その後、また変わっておりまして、実際この25人ずつにした事情が、陶芸を入れるとどうしても陶芸の作業室が25人しかキャパがないものですから、それで泣く泣く25にしたところがあったのですが、

そこは丸笠委員がおっしゃるような考え方は私たちの中にもありまして、人数を今増やす予定でおります。

○丸笠副会長

わかりました。

○事務局（田久保）

きょうは3回目までのご報告なものですから、経過はまた今後になります。

○三橋委員

まちづくりもいきいきもそうなのですが、市民大学だとかこういう行政がやっている講座の一番のポイントで感じるのですが、ボランティアもマイスターもそうなのですが、単なる行政サポートのボランティアの育成にならないようにしてほしい。ボランティアはあくまでもそれぞれの団体が独自のガバナンスを持って、行政と連携して協力する関係ではあるけれども、行政の下請け団体になるのがボランティアではないというところの視点を必ずきちんと明快にしておいたほうがいいと思います。ほかの千葉市なんかでもそうですけど、「ボランティア養成講座は単なる行政のお手伝いのための講座なんですか」という質問がやっぱり出るんですね。そのことだけご注意ください、そこはそういうことではないんだときちんとうたっていただいたほうがいいなと思います。

○高山会長

別の言葉で言うと、協働というのを明確に打ち出すということでしょうね。

○社会教育課長

そうですね、まさにそのとおりだと思います。そこで、今回それぞれの団体に入ってください。言い方は悪いのですが、そこから先は行政としては手を離して、うまくいけばそこで活動していただけるし、そうでなければほかの団体に入ってくださいというのを目標にしています。行政のお手伝いというと多分人は集まらないし、そういう形はしていない方向では考えております。ありがとうございました。

○高山会長

荒谷委員、何かありますか。

○荒谷委員

すごくすばらしい、今までずっとスポーツ健康大学から始まって、やっと一つ一つの学科もよくわかるし、私自身これを読んでいて、なるほど、これはこういう形のものででき上がったんだなど。それに対してこれからも、私の場合にはスポーツコミュニケーション

というところですけども、これもすごく大きく変わって、皆さんが今までの単なる出たとこ勝負というわけではないですが、そういうものではなくて、きちんと学びをどうやって活動して続けていくかという、それを地域に対してのというのが系統立てられた形のもの
の考え方なので、とてもよろしいのではないかと考えております。

○高山会長

ありがとうございました。

あと、松本委員からも質問が出ていましたが、今後、来年の入学案内に向けてどういう流れとかスケジュールをお考えなのでしょうか。

○事務局（田久保）

実は印刷をかけることとか実務的な部分がありますので、きょう経過を聞いていただいて、この後もう一回急いで検討委員会をやり、そこで概ね概要が決まる予定です。そうしないと12月1日の募集が間に合わなくなってくるという物理的な事情がございます。もともと12月15日から募集をしていましたから、そこに戻すとしても半月ぐらい余裕はあるかなというところですけども、せっかく12月1日からやりましょうと決めていますので、今回皆様にここでご報告するのが最後になると思います。今回の段階では。

ただ、委員会の中ではカリキュラムを毎年決めるのも、今は専任の講師がいらっしゃる学科とない学科がございますので、きちんとカリキュラムの委員会もつくってこなかったの、ちゃんとつくったほうが良いというアドバイスをいただいていますから、今後は引き続きカリキュラムについては毎年検討する場はあるのかなというふうには考えております。

○高山会長

本来ですと、7月24日の第2回検討委員会の後に運営協議会も開こうと思ったのですが、8月は皆さんのご都合が付きませんでした。

どうぞ。

○松本委員

そこが私としてはちょっと気になるところで、できればカリキュラム検討委員会の方々と我々運営委員会のメンバーとで一緒に話し合う場があってもいいのではないかと昔から思っていました。

それから、私どももだてに11年間受け皿団体をやっているわけではありません。一生懸命卒業された方たちを大切にしたいと思って会を運営しています。そういう人たちの声

というのも反映したものでないと、国が言っているからとか、中教審だからとか、僕に言わせると大学じゃなくて大学校なんだから、船橋市独特のものでいいはずだし、船橋市で3つぐらいの柱を立てろといったら、3つの柱の中でどうあるべきかを議論すればいいので、何でこんなに慌てなければいけないのかなというのが率直な感想です。

それと、今回この委員会に出てくるに当たって当会のメンバーの意見として出てきたのは、ボランティアというのがちょっとないがしろにされているのではないかと、福祉だとか環境だとか、もっといろんなボランティアがあって、そういうボランティアに対して一言も言葉が出てこない。こういう形でやるのはどんなものなのかなと。

実を言うと、卒業生の65%は大体福祉です。そのうちの8割は女性ですから、その人たちが仲間になって、ここで1年間過ごすというのは船橋独自のとてもいい施策だというふうに認識しています。僕は勉強会でいろんな市を回っていますけれども、皆さんうらやましがらんです。3日間コースとかいろんなコースでやっているのがありますけど、やっぱりまとまらないんです。

そういう意味でも、もうちょっと時間をどうしてとれないのかなと。今回は大改革ですよ。ここは運営協議会です。だとすると、もう少し時間をいただけないのかなというのが皆さんの意見です。12月1日に新聞記者発表をしてどうのこうのとか言っていたよと言ったら、何でそんなに慌てなきゃいけないのかなと、これだけ大改革をするのであれば、もうちょっといろんな角度の人たちから話も聞いてやられたらどうかなという話が多くありました。

それから、いきいき学部はいきいき同窓生という会で、これはいいか悪いか別ですけど、高齢者福祉課から助成金をいただいていますよね。18歳から入るといだけなくなるんですかね。いきいき学部の趣旨は活かされているという前提ですけども、だんだん崩れていくような感じもしているのと、他市で同じように若い人まで採用しようと決めただけで、たった2人しか入らなかったというような形で、それは50歳まで年齢を下げたという話でしたけど、平日の昼間に来られる人が何人いるのかなというのがちょっと気になる所です。そこを18歳にしたために、また乱れないといいなというふうにも思います。

それと、全部僕は文書で出しているのもあれですけど、パソコン学科というのは、右肩下がりですよ。私もパソコン教室の講師をしていますけど、今はもうスマホですよ。スマホはもうパソコンを超えていますから。女性も男性もほとんど今はスマホを持っていますので、スマホが行政との情報や、買い物、銀行などに対してでも、「Society 5.0」の話

を含んで最も大切で、例えば4学科のうち1学科をスマホ学科にしても、多くの応募が来ると思います。せっかくこれだけ大改革をやるのならば、その辺も見直されたらどうなのかなど。余分な話かもしれませんが、何で議題として出てこなかったのかなどと思いました。

○事務局（田久保）

紆余曲折、1案、2案、3案といろいろ出ているのですが。

○鳥海委員

きょうはおくれましてすみませんでした。

内容を十分把握していなくて申し上げるのは失礼かなと思ったのですが、入学して修了までの課程をそれぞれの学科、大きく分けてまちづくり、いきいき、それぞれの学部・学科に適応した検討委員会をやられたということの足跡は、私には十分わかるんです。どこの大学であろうと市であろうと、大体10年で一昔、今は早くなっていますので5年一昔なんて言われるときもありますけれども、私はそういうのを考えますと、ここまで運営委員会の皆さんに報告されて、検討委員会それぞれの時間とタイミングをねらってやってこられたということについては、私は大いに賛成したいと思っています。よくやられているなと思います。

これで最低3年、できれば5年ぐらいになるのではないかと思うのですが、やってみて、また考えるといっても決して遅くはないと思います。あまりちくちくやっちゃうとよくないのではないかと思います、継ぎはぎだらけになってしまうので。ここは非常に良く整理されて私はいいと思います。全部うまくはいきません。というのは、スポーツコミュニケーションはこれで全部満足か。スポーツコミュニケーションとボランティアと生涯学習とマイスターは学習内容がみんな違います、学科が。それが一つの大学校でやっているわけですから、相当努力していると思いますよ。それぞれの背景と条件があるわけですから、市の財政を考えて場所を考えてやられるわけですから、これで良いのではないですか。最後は社会貢献にして働いていただきたいというねらいですから、とりあえずスタートされたいかがでしようというのが感想です。ありがとうございました。

○高山会長

議事3号については、まだまだいろんなご意見や要望があると思いますけれども、この程度で次の議事に入ってよろしいですか。ありがとうございました。

次に、議事第4号「広報委員会について」、事務局より説明をお願いいたします。

○事務局（西本）

では、私のほうからご説明申し上げます。資料の4番をごらんくださいませ。

1 ページ目をごらんください。去る7月31日にこちらの市民大学校のほうで第1回目の広報委員会を開催いたしました。3 ページ目を開いていただくと、先ほどの入学願書のアンケート結果の30年度と31年度の両方を含めて確認しましたところ、やはり広報ふなばしを読まれて市民大学をお知りになった方が多いということから、今年度も広報のほうに魅力的な記事を掲載できるように努めてまいりたいと思っております。

また、パンフレットにつきましても、昨年度と同様に各所に配架をお願いするほか、今の現役の学生からも広めてもらうようお願いしたいと考えているところでございます。参考までに、昨年度のパンフレットの配布場所を4 ページ目に掲載してございます。

また、今回カリキュラムが新しくなることに伴って、入学案内のデザインも新しくしてみようかなと考えております。昨年度の入学案内・願書の配布場所は5 ページ目に配布先一覧を載せておきました。

次に7 ページ目をごらんいただきたいのですが、この7 ページ目は昨年12月15日に西部公民館において市民大学校の説明会を開催いたしました。参加者は24名とちょっと少なかったのですが、そのうちの20名が実際に入学をされておりますので、この説明会はとても効果があったものと考えております。また後でご説明しますが、今年度は12月7日と8日に、それぞれ東部公民館と中央公民館の2階にあります市民文化ホールのリハーサル室で実施を予定しております。

最後に、9 ページ目ですが、これが先日の7月31日の広報委員会の概要をまとめたものでございます。真ん中あたりの議事の報告の(2)ですが、「令和元年度の活動方針について」というところに今後のスケジュールが載っておりますけれども、先ほど申しあげました学部・学科説明会として、12月7日の土曜日には東部公民館の集会室、翌8日にはリハーサル室というところで行う予定になってございます。

そのほか、広報への掲載ですとか説明会開催のほかに、各種イベントでのPR活動ですとか、各種会報がいろいろありますけれども、そちらのほうにも記事の掲載を依頼していく予定となっております。

以上でございます。

○高山会長

ありがとうございました。

何かご質問等ございますか。松本委員、どうぞ。

○松本委員

広報委員会の中で特徴的なのは、学部・学科説明会を2カ所で開くというところが大きな違いです。それと、前回ちょっとうまくいかなかったので、この学部・学科説明会をどのように広報するかというところも今まで以上に力を入れると、参加者ももっと増えるのではないかとということで、この辺も前回よりは力を入れていったほうがいい。そのかわり、授業見学会というのはあまり効果がなかったということで、今回は廃止という形になっています。

あとは、カリキュラム検討委員会の動きがすごく激しかったので、今のところまだチラシもポスターも考えていませんけれども、もうちょっと見えてきたところで、基本的なデザインが変わらずに少しだけいじればいいということであれば、1日か2日で間に合うとは思いますが、サポートしていきたいなと思っています。

○高山会長

昨年は西部で、今回は2日間で2回を東部と中央ということで、場所的も変更されていると思います。よろしく願いいたします。特段よろしいですか。

三橋委員、どうぞ。

○三橋委員

さっき松本さんがおっしゃったことは、今後の運営協議会をどのようにお持ちになるかということの参考にしていただきたいと思うのですが、運営協議会なので、本来は中身を協議しなければいけないのを、報告承認というアライズづくりの会議体になっていたら、やっぱりおかしいのかなというのが僕の率直な感想です。だから、ここの中でもカリキュラム検討委員会の先生方の懇談なり意見交換会なりというのを何回か要望として私も出させていただきましたけれども、そのことがなくて決められて、スケジュール的に大変タイトだったというのもあるのでしょうけれども、ただ、今後、先ほど鳥海委員もおっしゃいましたけれども、3年後、当然その都度見直していくといったときに、やっぱりそこは少し丁寧にご配慮いただいたほうがいいのかなという感想を持ちました。

○高山会長

本日の協議会においてご審議いただく議事は以上ですが、特にご質問、ご意見がなければ、以上で議事を終了させていただきます。

なお、議事録の署名を鳥海委員と荒谷委員にお願いしたいと考えていますが、鳥海委員

と荒谷委員、よろしいでしょうか。

(両委員 了承)

○高山会長

では、よろしく申し上げます。

最後に、課長のほうからご発言願います。

○社会教育課長

どうもありがとうございます。

少ない中で運営協議会のほうの協議が不十分なところがあることは大変申しわけございませんでした。あと、急ぎ過ぎではないかという意見に関しましても、本日は全体で拾おうとしている中で、やっぱり早急な立て直しが必要だということでご理解いただきたいと思っております。

今後、やはり委員のほうも変わっていくような形だとしても、やはりこの運営協議会の意義というのは大きいところがあると思いますので、そちらと手を携えて行政としてもやっていきたいと思えます。変わられる方もいらっしゃるし、多分再任される方もいらっしゃるので、これで終わりではなくて、いろいろなところで皆さんにいろいろ教えてもらうこともあると思いますので、本当にありがとうございました。

○高山会長

ありがとうございました。

これで本日の協議会は終了になります。委員の皆様には、議事進行にご協力いただきましてありがとうございました。

これをもちまして、令和元年度第1回ふなばし市民大学校運営協議会を閉会いたします。ありがとうございました。

午後3時41分閉会